

東北大学全学教育「英語 A」（1年生）授業実践報告

江藤，裕之
東北大学大学院国際文化研究科：教授

<https://hdl.handle.net/2324/4798351>

出版情報：オンライン授業の地平：2020年度の実践報告，pp.22-22，2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International



1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

全学教育(教養課程)英語科目の中で学部1年生対象の「理解」に焦点を当てた本授業では、TED 等のインターネットで配信されている動画を用いて、①英語のスピーチ、プレゼン等を、テキストを参照しながら聴くことで耳(Listening)と目(Reading)の両方から効率的に把握し、そこで得た知識を口(Speaking)と手(Writing)に応用する、②英語の自己学習のためにインターネット上の情報にアクセスする、③学術研究や国際社会のさまざまな領域で用いられる英語を理解するための読解力と語彙力を身につけることを目標としている。

テキストは指定せず、学期に数本の英語動画を、1本の定番を除いては、その時々話題になったテーマや参加学生の希望する内容のものを見ている。評価は、平常点(リアクションペーパーによる質問や振り返り)、読んだテキストに関するテスト、課題(読んだテキストから1本選んで感想を英文で書く)を総合して行っている。これまではパソコン常設の教室で行っていたが、2020年度入学者からBYOD—キャンパスへのノートパソコンの携帯—が義務付けられたため通常の教室での授業が可能になった(なるはずであった)。

コロナ禍の影響で4月の早い段階で全面オンライン授業とする決定がなされ、5月の連休明けから授業開始となった。オンデマンド、リアルタイム、ハイブリッドといった選択肢があったものの、大学事務、担当教員、そして受講学生のいずれにも初めてのことで何が一番よいのか誰にもわからないというのが正直なところであった。いろいろと考えた末に、消去法でもっともリスクが少ないと思われたオンデマンド方式を採用することとし、通常の授業で使用する予定であったパワーポイントスライドに音声を入れたものを動画(MP4)化し、Google Classroom上にアップした。連絡事項、テキスト、関連資料、動画情報等はすべてemail(連絡用にアドレスを作成)、及びGoogle Classroomの両方で知らせることにした。また、学生の利便性を考慮し、動画視聴は時間割に定められた日時に限定せず、アップした週の都合の良い時間に行えばよいものとした。

遠隔授業という慣れない環境での授業形態となるので、可能な限りシンプルかつフレキシブルに対応した。

後期は、学生・教員ともにZoomやGoogle meetの使い方にも慣れ、大学内のネット環境も改善されたので、予定された授業時間内にリアルタイムでの対面式のコロキウムを行ってみた。授業そのものはオンデマンド方式を継続したが、いわゆる雑談、余談のたぐいを希望する学生と話す(だべる?)時間を試みに設けてみたのだが、これが予想を反しての好評であった。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

今回のコロナ禍は、われわれ学校関係者には大迷惑としか言いようのない惨禍をもたらしたが、その一方で、インターネットを使った遠隔授業や会議のプラス面(時間と場所に拘束されない、まさにオンデマンドでユビキタスな開催が可能)が認識され、また、そのための技術が個人差はあれ習得できたという思いがけない収穫もあった。

今後、コロナ禍が収束に向かい、対面授業が可能になっても、オンライン形式の有用な点を取り入れていくことで、授業をより効果的に進め、学生の自学自習を助けることができる。しかし、今回のことを通して痛感したことは、教室で学生を目の前にして行うというこれまで当たり前だったことが、いかに貴重であったのかということだ。それは、少しではあるがリアルタイムでのコミュニケーションで、学生の生き生きとした姿を見ていて再認識した。今後の重要な課題は、これまでの対面式授業に、いかにネットの利便性をハイブリッド化していくかということであろう。